第５回伊予市図書館･文化ホール等管理運営アドバイザー会議　会議概要（無記名版）

日時：平成 30 年 3 月 13 日（火）　10 時 00 分～11 時 30 分

場所：伊予市役所　３階 庁議室

出席者：アドバイザー会議委員 7 名、事務局 6 名、委託業者 2 名

配布資料：資料①　平成 29 年度伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議第４回資料

資料②　講座・研修プログラムのご提案および他市事例

1. 開会

・　開会の言葉（事務局）

2. 委員長あいさつ

・　本日が今年度最後のアドバイザー会議となる。本日も、前回からの継続議題である「市民参画」について検討したい。「市民参画」は、この施設が積み重ねて来た計画の心臓であるので、皆さんのお知恵を貸していただきたい。（委員長）

3. 議事

（1）市民参画の範囲に係る検討―サポーター組織および人材育成講座について―

・　本日も、前回に引き続き市民参画について協議したい。（委員長）

・　お手元の資料について、前回と重複する部分もあるが振り返りもかねてご説明申し上げる。1 ページ目は、市民参画に関する活動を開館までの年度ごとにリストアップしたスケジュール表である。行政主導のものと市民組織主導のイベントを上げている。次ページには、市民参画に関する体制図をお示ししている。市役所と市民をつなぐ役割を市民組織が担っているイメージだ。市の社会教育課が行う自主事業への協力と、市民が自主的に行う貸館事業への協力が主な活動内容である。3 ページ目には、市民参画の段階をＡ～Ｄの段階別に図示している。4 ページからは各段階の市民参画の位置づけについて詳しく説明している。5 ページには、平成 30 年度の人材育成講座案をご提案した。5 月からサポーター、ボランティアについての講座を開始するとともに、より発展的な内容としてプレイベント実行委員会向けの事業企画の講座を検討している。段階図のＡ～Ｃにあたる内容の講座を予定しており、順序を追って市民参画への深度を深められる内容になっている。6 ページから 11 ページまでは段階別の他市の市民参画および人材育成講座の事例を紹介している。（委託業者）

- 前回の振り返りと、伊予市はＢ、Ｃあたりの人材育成を目指したい主旨の説明と、そのための取組みをご紹介いただいた。事例には伊予市と人口の近い市を取り上げている。なお、茅野市は市１００％出資の株式会社が指定管理者として運営している。市民組織のＮＰＯについては、指定管理者の補助ということではなく、事業企画などに参加をしている。ある程度独立したＮＰＯとして、指定管理者とともに人材育成のプログラムを作っており、市民組織が中心になって人材育成をしているということではない、ということを補足として申しあげる。（委員長）
- 次に、提案頂いた伊予市の講座のプランについてだが、来年度すぐ 5 月からの実施となっており、時間が迫っている。まず子どもたちの参加は 5 月からということになるが、5 月～11 月については高校生以上が対象となるのか。（委員長）
- 育成講座については、実際の建物がない中でやっていかなくてはならない。実際のイメージを伝える工夫が必要だと思う。事例だと実際の現場で体験しているが、ない中で実際のものに触れるなど工夫をしていかなくてはならない。（副委員長）
- 確かにそこが一番難しい。しかし、建物が出来てからやるのでは遅い。市民が市民をおもてなしする、企画を実施することを考えると、早い段階で取り組む必要がある。他市への見学予定はないのか。今年度は現場見学会としてイメージを掴んでもらうしかないだろうか。（委員長）
- ５月の講座実施ということだが、新年度入ってすぐのことになるので、もし手順が分かっていれば早めに教えて欲しい。魅力を発見する、ということは子どもがきちんと魅力を理解しているかが肝心だが、はたしてこの時期で良いのか。（委員５）
- まずは子どもたちにという思いがある。実施日程は土日を考えている。魅力に関しては、伊予市だけではなく愛媛県内での魅力を伝える講師の先生にまずお話して頂き、その講座の後にクイズづくりを出来ればと思っているが、まだ具体的な内容までは整っていない。（事務局）
- 場合によっては時期をずらすかもしれない（委員長）
- 先生方がおっしゃる懸念についても承知している。（事務局）
- ４月から人が変わる可能性も双方あり、その場合には新しい人員で議論をすることになる。時期については再検討願いたい。大人が考える魅力と子どもが思う魅力は違う。大人の魅力を押し付けてはならない。（委員長）
- 郡中 200 年祭の時にスタンプラリーを実施したが、その時は半年以上かけて準備し、何回か回数を重ねた上で実施している。じっくりと子どもたちに考える、伝える時間を取るべきである。プログラムが組めるのであれば 子ども達が自主性をもってやろうとするようにしなくてはならない。200 年祭は生徒会の子に取り組んでもらった。（委員２）
- 委員２のお話からも、焦らず構成づくりをすることの大切さが伺える。開館後も継続した取組みにしていくために、もう少し丁寧に検討する必要がある。（委員長）

- 各地区の事業集めを材料として揃えていかなくてはならない。やらされている感は子ども達のモチベーションにつながらないので、引き続き考えさせて頂けたらと思う。（事務局）
- 建つのは旧市街のど真ん中だが、双海や中山も含めた市民の施設になる。その集約点になるためにも子どもたちと一緒に考えるというプロジェクトは大切になる。（委員長）
- 開館後はどのような人材育成講座を持つべきなのか、長期的な制度設計が必要だと思う。講座ではなく、事業の中でその部分も持つから良いのか、他施設での子ども向けの事例があればお聞かせいただきたい。（委員５）
- 黒部市の国際文化センターコラーレの「リトル・カルチャークラブ」の事例がある。子ども達がここで学び、指導者として戻ってきて教えるなどの発展もしている。（委託業者）
- いわきアリオスの「たんけんアリオス」という演劇に特化した企画がある。高校生とプロがお話を作ってホールの裏まで小・中学生を案内するという講座が年に 2 回、これまで 15 回ほど程度行なわれている。やらされている感を無くすためにお芝居仕立てにしている。こうした取り組みはとても手間のかかるものだ。各委員よりご指摘いただいたように、少なくとも開館後 3 年間程度を目処にした長期的な視野での計画が必要になる。（委員長）
- 中学校では、31 年度から自己実現のために職場体験が 5 日間予定されている。図書館で業務を体験するという役割で子ども達を受け入れてもらえるという取組みなど、そういう場を作っていただくとありがたい。子どもが少なくなっている中で、戻ってくる場所があるということはとても大切だ。（委員４）
- 他市でもそういった事例は多い。（委員長）
- 中学生だけではなく、図書館では 2 日間という短さではあるが、インターンシップで大学生に来てもらっている。しかし、半日や１日ではなかなか学びにつながらない。単純な作業ではなく、意味のある仕事として取り組んでもらうことが大切だと思う。（事務局）
- やらされている感のない事業、長期的な視点で地域や施設に魅力をかんじてもらう事業、という話が出たが、他にご意見はないか。（委員長）
- 仕事の価値を伝えるプログラムが必要だと思う。スキルを体験するプログラムはたくさんあるが、それが社会に対してどういう意味や価値を持つのかを伝えられるものでなくては意味がないだろう。そういった事例はないだろうか。（委員２）
- それは、子どもたちに対する取組みという点であるか。（委員長）
- 子どもに限らず、大人でも同様である。市民参画をすることで、自分にとってこんな価値があったとか、それが社会へどういった波及効果を及ぼすのかを伝えるプログラムというのがなかなか無い。スキルを伝えて終わり、となりがちだと思う。（委員２）
- 個人的な経験からの話になるが、資料の６ページ目にある「撫肩ガイダンス」。これは、

公演はおまけで、当初は、市民から公演をやりたいという声が出たらやろうという内容だった。講座の途中でやりますかと聞いたところ、公演をやりたいという声が上がった。公演後に、何が一番嬉しかったかと聞いたら、きちんと最後まで公演という形としてやりきれたこと、お客様が楽しかったというアンケート結果が嬉しかった、という答えがあった。2 年後には、演出・脚本もやって、舞台に立つ公演を行った。プロにアドバイスをもらいながら、前年の講座のメンバーが核となって公演を実現した。何かアウトプットとして、小さなことでも実現すると違う。（委員長）

- ５日間の職場体験であれば、そこで形に出来るようなものが出来たらいいなと思う。例えば、双海地域の読み語り隊（22～23 名）によって、地域の物語を基にした絵本創作をしている。大型絵本作成、スライドショーの動画作成などをやっているので、そこに参加してやってみるという方法もあると思う。何かの課題があってそれを達成していく、みんなに居場所と出番がある企画。そういうものが提供できればと思う。（委員２）
- 演劇のワークショップでも 5 日間程度で芝居を作るものがある。新居浜市政 70 周年では 2 週間くらいでワークショップを行い作品を作った。図書館では何か事例はあるか。（委員長）
- 先ほどより話題に上っている職場体験、ジョブチャレンジのプレ企画として、今年度 4 日間の受け入れを行った。授業の趣旨として、「仕事の大変さを知るために、地味な仕事をやらせて下さい」という依頼があり、書架整理や修理などの作業を体験してもらった。元から図書館に興味のある子ども達だったので意識も高く、そういった作業でも楽しかったと好評だった。子どもたちは、仕事の裏側を知ると親近感を持ってくれる。新しい図書館のプレイベントでも、サポーターづくりをしていくことを見据えて、例えば本の並びを理解するとスムーズに返却作業ができる、補修をやってみよう、読み聞かせを長くしているボランティアが指導してお話し会のサポートメンバーになってもらうなどのプログラムを検討してはどうか、と思った。（委員１）
- 中学生が小学生に読み聞かせをするという取り組みなどはどうか。（委員長）
- たしかに、子どもは子どもに読み聞かせしてもらうのが好きである。県立図書館でも専門学校生のお姉さんにやってもらうととても喜ばれる。子どもが子どもに何かを教えたり、一緒に企画をする、ということが良いと思う。（委員１）
- この施設が建つと 50 年は使われる。子ども達に愛されないと将来はないだろう。大人向けの回を削ってもいいかもしれない。（委員長）
- 小・中学生が頑張っている姿を見たら大人も頑張ると思う。あえて大人と子どもを分けなくて良いのではないか。（副委員長）
- 子どもを中心にするが、大人も参加する。また、よくある企画だが、どこかでフロントスタッフ体験など、楽しいことと地道な裏方のことを同時に行っていかなくてはいけない。（委員長）

- 市民参画の位置付けについて、どうしても図書館や劇場の運営に寄っているという印象を受ける。市民にとってみたときに参画の結果、自分にとってどうなのか。アウトプットからのアウトターンというか、市民参画が手段になったときに、その先に何があるのか、それが分からないとやらされている感につながってしまうのではないか。自分にとって価値がある、ということが伝わる表現の仕方があるのではないか。（委員２）
- 例えば、講座のタイトルなど。（委員長）
- 図書館文化ホールの運営に対する協力が良いことだよ、ではなく、そこはあくまでも途中経過であって、市民一人一人に返ってくるものがあるはずだと思う。（委員２）
- 確かに、舞台に立つことについてはそれ自体が成果として分かりやすい。しかし、裏方で何が返ってくるのか、説明は難しいところだ。（委員長）
- ないものねだりかもしれないが、もっと幅広い視点であっても良いのではないかと思った。（委員２）
- 演劇のワークショップは分かりやすく自分のためになる。委員２が仰ることは、施設そのものがいかに町に良い影響があたえるか、そこに自分がどう関われるかということを分かってもらわないと続いていかない。（副委員長）
- その辺りはこれまでのワークショップで少しずつ醸成して来ているのではないかと思う。（委員２）
- 音楽や演劇に熱心に関わる愛好家は3%程度と言われている。伊予市でいうと大人が900人程度ということになるが、町中の賑わいを作るには3%では困るので、にぎわいを作るために縁側モールを作った。賑わいのある施設という理念でこの設計が選ばれている。そう考えると、今出たご意見は大切な視点だ。まずは、講座のタイトルを参加したくなるようなものにするところからスタートして、子どもたちにも主体的に参加していただき、図書館やホールを好きになってもらうことにつながって行けば世界が変わるかなと思う。（委員長）
- 市民が変わり、手伝っていかないとそうはならない。市民参加から行政参加へ。館側の主導ではなく、市民が何かをやるときに館が手伝うイメージ。市民参加ではなく市民参画にしていくことが必要。そういった方向性を打ち出していかなくてはいけない。（委員２）
- 資料中で事業企画会議と書いた内容は、やりたいことに対して館が手助けをする意図だ。貸館が多いことはとても良いこと。ただし単に貸すのではなく手助けをすることが肝心だ。図書館でも同じことがいえる。バブル崩壊後以降つい最近まで、貸館はいけない、自主事業をやれやれと言われて来たが、貸館でクオリティが高ければ、収入があり、主催者のモチベーションも高い。それが一番良いことで、更にその方が面白い。開催にあたって、専門的な知識が足りなければ館側が足りないところをサポートする。そういった丁寧な貸館が大切だと思う。（委員長）

- 館側が中間支援をしていくことが必要で、結果として市民のためになる。（委員２）
- 伊予市の魅力作りのために、縛りというか冠をつけて事業をするというような、常にそれについて考えなくてはならないような形はどうか。そういうものを応援していきますよというテーマを設定しながらやったらどうかと思う。（副委員長）
- 楽しいのはやりたいことが実現できること。この人がそんなに楽しいなら付き合うか…という輪が必要。そのためには伊予市のためということもあるが、個人の思いが大切。それが結果的には伊予市のためになる。（委員長）
- 中間支援はスキルが必要。一緒に考えながらやっていけるようにならなくてはいけない。育てていかないといけない。（委員２）
- 子どもたちが妄想したこと、やりたいということを実現してあげられることが大切。（委員長）
- 魅力という言葉が出てきたが、子ども達が魅力だと感じたことをどう引き出して魅力にしてあげられるか。子どもたちが思い描いていることを、教師が支援したというようにはわからないように、子ども達の手でやらせるということ。（委員３）
- それが先生方に入って頂いている大きな理由だ。大人が徹底して裏方に回って支援できる仕組み。大人の独りよがりにならない方法を考える必要がある。（委員長）
- そもそも人材育成というのがお仕着せでもあるが、すでにスキルをお持ちの方も沢山いる。そういった方の居場所と出番を作るということが改めて大切だと感じている。職場体験の際も、好きなことや得意なことを伺って、それを活かせるようにしている。受け皿をどう整えるか、どう個人の持つスキルや趣向と講座、ボランティアがマッチングしていけるかということも考えていきたい。（事務局）
- まちとひとが活きてくるということに話題が広がってきた。この複合文化施設がそうした考え方の中心になることを共有するということが大切だと思う。また舞台はそれなりに危険な場所。安全管理がとても大切で、そういった仕事について講座で共有することも大切である。フロントスタッフ、レセプショニストがどんな仕事をしているかなど、事業企画で市民が中心であっても、安全管理や報告書も必要だということをお伝えすることも重要だ。そういったあたりも含めて、事務局で講座の計画を組みなおしてはいかがか。（委員長）
- 具体的なプランについては、新年度の人員体制を配慮しながら、改めて検討したい。（事務局）
- 色々と風呂敷を広げたが、できることは人とお金の関係で決まってくる。ただ、一つ言えるのはまず一歩ということで、来年度からやった方が良い。学校との取組みについては、もう協議を始めないといけない。出来るだけご意見を取り入れながら、5月頃からスタートしたい。（委員長）

（2）その他

- 次回のアドバイザー会議の日程について事務局より以下の連絡があった。
- 来年度のスケジュールについては、まず早々にルール作りをしなくてはならないということで、6 月に条例を議決するための手続きを進めている。6 月に条例が議決次第、順次利用者向け案内を作成する予定だ。（事務局）
- 平成 30 年度のスケジュールということで、アドバイザー会議については全 5 回を計画している。第一回は利用者向け案内の検討、開館に向けた広報計画や、愛称募集に関して協議したい。第二回、第三回は事業計画について検討したい。秋口の補助金申請を見据えた計画が必要なので、事務局の事業方針をお示しし、それについてのご意見を頂きたい。第四回、第五回は、開館後の運営体制として事業評価方法について事務局案へのご意見を頂きたい。（委託業者）
- アドバイザー会議の委員の皆様には、ぜひ 30 年度も引き続きお願いしたい。開館事業に関することと、内部調整に関することの 2 段構えでご助言をいただきたい。（事務局）
- 次回のアドバイザー会議の日程については、来年度早々にスケジュール調整の上、ご連絡したい。（事務局）
- 一年間、委員の皆様には、たくさんのご意見、ご協力を頂き感謝申し上げる。来年度は対外的なもので大きな議題としては、愛称募集が控えている。また、近隣では、ほぼ同時期に四国中央市が開館する。ライバル視する必要はないが、広報計画や事業計画の面において埋没しないような注意が必要だ。四国中央市の方が人口は多いのだが、我々伊予市はこういう個性や気持ちでがんばっている、と伝わるようにしていきたい。（委員長）
- アドバイザーの委員の皆様には、建設的なご意見をいただき感謝申し上げる。開館後 50 年間は、魅力ある建物として継続していきたい。そのためには、伊予市の魅力とは何かがキーワードになる。子どもたちの恒常的な施設の利用が推進されれば、その後ろにいる親世代の関心も出てくる。そうすれば主体的にこの施設が利用されていくのではないかと考えている。来年度６月に議案を提出し、（仮称）文化交流センターという施設名称が議決されれば、次は愛称の検討・募集も進んでいくと思うので、一歩一歩進んでいきたい。今年度、ご尽力いただいた委員の皆さまに厚く御礼申し上げる。（事務局）

4. 閉会

- 閉会の言葉

以上